

次の複合災害に備え 真に強靱な社会を

東日本大震災・福島第一原発事故から10年。多くの人が語っているが、朝日新聞3月11日朝刊「科学」の「原発震災」を警告していた石橋克彦・神戸大名誉教授の発言に注目。写真は1994年刊行の『大地動乱の時代—地震学者は警告する』岩波新書。発言を抜粋して紹介したい。

南海トラフで起こる巨大地震について「最大級であれば被災地は首都圏から九州まで広がり、過密都市から過疎の山村まで多種多様な災害が生じて、被害は東日本大震災より一桁以上大きくなるでしょう。『超広域複合大震災』というべきものです。社会全体にわたる根本対策を考えなければいけません」

「揺れや津波に強くするだけでなく、被災後は緊急対応力と回復力も高める必要があります。救援の対象が膨大で行き渡らないおそれがあり、どこも自力で生き延びなければなりません。しかし、人口減少や高齢化、地方の疲弊、都市の過密などで、自滅する地域が出たり、日本の衰亡につながったりするかもしれません」

「今の日本は新たな感染症や、気候変動による世界規模の災害にも弱い。食料自給率が低く、観光や貿易に頼りすぎている。その危うさはコロナ禍ではっきりしました。これを機会に都市の過密と地方の過疎を抜本的に解消し、県単位くらいで食料やエネルギーを基本的に自給できるような、分散型の社会に変えていくべきです」

「安倍政権以来『国土強靱化』や『地方創生』が声高に言われますが、経済成長路線の一環に過ぎません。過度な国際分業・自由貿易依存を改め、農林水産立国を目指すくらいにしないと真に強靱な社会にはつながらないでしょう」

「『一極集中の是正』と言いながら、目先の便利さやにぎわいを求めて依然として集中が進んでいる。やはり大都市の震災の怖さの想像力が足りていないようです」

「1854年の南海トラフ巨大地震では、翌年に首都直下の安政江戸地震が起きて死者約1万人の大被害が生じました。地震活動期の今、分散型の社会・国土に早く変える必要があります」

「10年前、科学技術の弱点や複合災害の怖さがつくづくわかったはずなのに、今は元の木阿弥です。大自然のことを知識として知るだけでなく、感性として一人ひとりが畏敬の念を持つようになってほしい。人類より桁違いに歴史の長い自然物のウイルスに対して、『打ち勝つ』という意識も傲慢さではないでしょうか」

「ことあるごとに、これはおかしいのでは、危ないのでは、と考える理性的な社会が育ってほしいと思います」



(2021年3月13日)